

日本語日常談話における重なるの様相

—学習者はなぜ重ならないのか—

本田 明子

1. はじめに

日本語の談話における「重なり」は、日本語母語話者同士の日常会話においては、頻繁に生じる現象であるが、学習者と母語話者との接触場面談話においては、少ないことが指摘されている（深澤1997）。

本研究での重なりとは、複数の話者が参加する談話において、ある一時点で複数の話者が同時に音声を発する現象をさしている。この現象は、「割り込み発話」「さえぎり」などとも呼ばれているが、「割り込み」「さえぎり」といった名称は、この現象の負の側面を象徴している。日本語の談話における重なりには、相手の発話をさえぎるのではなく、ともに会話を成立させる「共話」（水谷1993）に寄与する重なりがあることも指摘されており（本田1997、深澤1997他）、発話を妨げるものばかりではない。本研究では、この現象の談話の進行に寄与する積極的な機能をおもに研究の対象とするため「重なり」と呼ぶことにする。

このように談話の進行に寄与する働きも持つ重なりは、接触場面においてどのように用いられているだろうか。

本研究では、母語話者場面と接触場面の重なるの出現状況を比較し、どのような特徴があるのかを明らかにし、その原因を考察する。

2. 重なりに関する先行研究

2.1 先行研究に基づく重なるの分類

これまで、重なりについては多くの研究がおこなわれてきた。サックスらの会話分析（Sacks et al. 1974）により指摘された「順番交替」のルールによれば、「一度に一人ずつが話す」ことは基本的ルールの1つである。順番の移行のさいに、切れ目や重なりが生じることは少なく、あるとしてもわず

かなものであるとされる。このルールに反する発話の重なりは、‘interruption (割り込み)’と呼ばれ、会話において避けるべきこととして扱われてきた。

一方、日本語の自然談話をデータとした研究では、重なりは参加者同士がともに発話を形成する機能をもつという指摘もなされている。水谷 (1993) では日本語の談話は参加者同士がともに発話を形成していく性質を持つ「共話」であるとされており、深澤 (1997) では、「働きかけの割り込み発話」をきっかけとして話し手と聞き手に相互交流が生まれ、共話が形成されることを指摘している。また、本田 (1997) では、女性のインフォーマントを中心とした自然談話をデータとし、発話の重なるの種類とその出現状況から、重なるの機能を分析し、共話を形成し、談話の進行に寄与する重なりがあることを指摘した。

これらの先行研究やこれまでの研究成果から、重なりには発話の進行に意図的に働きかけるものと、偶発的に発生し、発話の進行に働きかける機能を持たないものがあるといえる。発話の進行に意図的に働きかける機能を持つものには、発話をさえぎりその進行に対して負の方向に働くものと、発話の進行を促しサポートする方向に働くものがある。

本研究では、発話者が意図的に生じさせる重なるのなかでも、発話の進行を促す働きを持つものに注目し、母語話者場面と接触場面での重なるのあらわれ方を比較する。

2.2 重なるの発生の条件に関する先行研究

串田 (2006) では、重なりを「オーバーラップ」と呼び、「進行中の会話の一種の『もつれ』」であり、ターンテイキングの乱れたもので、会話の参加者たちは何の意味も感じていないと述べている。また、「参与者自身によって、言葉を重ねるべく工夫された出来事」(串田2006:116)として生じる重なりを「ユニゾン」と呼び、区別している。そして、このユニゾンが生じる要因として、Lerner (2002) を紹介している。

串田 (2006:120) によると、ユニゾンにおける予測可能性をもたらしりソースとして Lerner (2002) は以下の3点を挙げているという。

- (1) 行為とターン構成単位の構造に関する複数のリソースの収斂
- (2) 産出されつつある語の最初の一音節
- (3) 先行発話を反復することの投射

(1) とは、発話の統語構造や語句の構造、その発話の行為タイプといったさまざまな要素から複合的に判断して、発話の末尾に来る1つあるいは2つの語句がほぼ確実に予測可能になることであると説明されている。

ここで指摘されているように発話の進行を促す重なりが成立するためには、話し手が何をいうのか予測することが不可欠である。本稿では、実際の会話データに基づいて、この予測がどのようにおこなわれているのか検討し、母語話者場面における重なりと接触場面における重なりとはどのような違いがあるのかを考察する。

2.3 研究のデータ

本研究では、宇佐美まゆみ監修(2011)『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版』をデータとした。この宇佐美(2011)データには、さまざまな場面の談話が収められているが、本研究では、同性同士の自然談話のうち、参加者2名による雑談の会話を対象とした。対象としたデータは、68会話35385発話である。そのうち母語話者場面は37会話、接触場面は31会話であった。

3. 分析

3.1 データにみる重なりの出現状況

まず、データにあらわれる重なりの数を概観してみる。その数は、表1のようになり、母語話者場面と接触場面に大きな差があるわけではないが、男性同士の会話では、母語話者場面と接触場面とで、重なりの出現率に2倍近くの差がある。

接触場面の重なり数には、母語話者が学習者の発話に重ねたものと、学習者が母語話者の発話に重ねたものの双方を含んでいる。この両者を比較する

と、母語話者の発話が学習者の発話に重なるものが多い。たとえば発話数346の女子学生同士の初対面会話（会話番号130）では、29の重なるのうち、台湾人学習者の発話が母語話者の発話に重なった回数は10回で、重ねられた回数は19回となっている。

表1 重なるの出現状況

場面	性別	親疎	会話数	発話数	重なり出現数	重なり出現%
母語話者場面	女性×女性	親しい友人	9	5795	767	13.2%
	女性×女性	初対面	10	5490	911	16.6%
	男性×男性	親しい友人	10	7508	852	11.3%
	男性×男性	初対面	8	2514	290	11.5%
接触場面	女性×女性	親しい友人	10	4569	463	10.1%
	女性×女性	初対面	12	4869	502	10.3%
	男性×男性	親しい友人	—	—	—	—
	男性×男性	初対面	9	4640	266	5.7%

この会話番号130のなかで、学習者の発話が重なった例には、以下のようなものがある。このデータ中、「<事故です?>|<|」（⇒部）の部分は、「事故」から相手の発話が始まり重なりが開始されたことを示し、「<ちょっと>|>」は重なった側の発話であり「ちょっと」で重なりが終了していることを示す。

例1 (J1:日本語母語話者 L1:台湾人学習者 初対面会話)

J1 「L1姓」さんバイク乗れますか?。

L1 乗れます<笑い>。

J1 バイクは便利ですけど、ちょっと怖いですね<笑い>。

L1 バイクで、(うん)学校通ってます。

J1 あ、そうですか [↓]。

J1 うん、なんか危ない目に遭ったこととかありますか? [↑]。

L1 危ない目、あ、はじめは事故があったことがありますけど。

- J1 そうですか [↑]。
- L1 大したことではないんですけど <笑い>。
- ⇒J1 <笑いながら> どんな <事故です?> |<|。
- L1 <ちょっと> |<| だけ (うん)。
- L1 で、《沈黙2秒》たぶん技術があまりうまくはないですから (<笑い>)、で、転んでで怪我をしたんです。
- ⇒J1 こっちの方 ‘かた’ あの、雨が降っても、(はい) カップを着て <乗りませんか?> |<|。
- L1 <でも雨の日は> |<| バスに乗ります <2人笑い>。
- J1 <笑いながら> うんうん。
- L1 はい。

この会話部分では、学習者 L1が母語話者 J1に重なった例が2回みられる。1つ目は、バイク通学をしている学習者が、事故にあった話をするなかで「大したことではないんですけど」「ちょっとだけ」と言葉を選びながら話をつなぐ合間に、母語話者の「どんな事故です」という質問が発せられて、結果的に学習者の発話が母語話者に重なる形になっている。そして、2回目は、母語話者の「こっちの方、雨が降ってもカップを着て(自転車に) 乗りませんか?」という発話の途中で、学習者の発話が「でも雨の日はバスに乗ります」と重なっているが、母語話者の「この地方では雨が降ってもカップを着て自転車に乗る人がある」という観察に応えるものにはなっていない。母語話者の発話中の「雨」のみに反応し、学習者自身は「雨の日にはバスに乗る」ことを表明する発話になっている。

このような接触場面における学習者の発話から母語話者の発話への重なり
の例は、次節以降に述べる母語話者同士の重なりとは質の違いがみられる。

3.2 母語話者場面の重なり出現の条件

それでは、母語話者場面にはどのような重なりがみられるだろうか。宇佐美 (2011) データ会話番号251には以下のような重なりがみられる。

例2 (J2:日本語母語話者 J3:日本語母語話者 初対面会話)

J2 でも「J3の苗字」はその点、多分間違えようがな、<ないですよ
>|<|。

J3 <あ、ない>|>| ですね<笑いながら>。

この発話の場合、J2が、「多分間違えようがな」で言葉がつまり、「ないですよね」と続けているが、この「な」によって、J3は「ないです」と続くことを予想し、発話している。これは、上述の Lerner (2002) の (2)「産出されつつある語の最初の一音節」がリソースとなり、予測可能となった重なりであろう。

また、次の場合は、(1)「行為とターン構成単位の構造に関する複数のリソースの収斂」による予測可能性によるものだ。

例3 (J2:日本語母語話者 J3:日本語母語話者 初対面会話)

J2 受験の時に覚えたのは、ほとんど抜けちゃったなっていう (そうなんか) 感じかな。

J3 浅く詰め込んだものは (うん)、見たことはあるんだけど (うん)、意味まで、

J2 出て<こない>|<|。

J3 <出てこない>|>|<笑い>。

J2 うん、そうそう。

J3 難しいなあ。

J2 そんな感じ。

J3 うん。

このような Lerner (2002) に指摘された予測可能性をもたらす要因のほか、以下のような重なりもみられた。

例4 (J4:日本語母語話者 J5:日本語母語話者 初対面会話)

- J4 え、おいくつですか。
J5 今21です。
J4 あ、じゃ、今学生さんですよ？。
J5 はい、そうです。
J4 じゃ、え、4年生、ですか？。
J5 私は一浪してるんで、今<3年です>|<|。
J4 <あ、3年?>|>|、じゃあ一緒ですね。
J5 ああ。

これは、初対面の学生同士の対話場面に出てきた会話であるが、相手が21歳という情報から、大学4年生と推測したところ、「一浪」という言葉を聞いて、「3年生」と予測し直し、発話を重ねたものであり、「社会文化的知識」に基づき相手の発話内容を予測することができたために、同じ語句を同時に発することができた重なりだといえるのではないだろうか。

このような発話の進行を促す重なりの出現には「予測」が必要であり、その予測の可能性は、先行研究において指摘された3つの要因に加えて、「社会文化的知識」という要因により、成立することがわかった。

この4つの要因を考えたとき、接触場面において重なりが生じにくい原因として以下のことが考えられる。

- ① 学習者の言語能力が十分でないため予測ができない
- ② 学習者の社会文化的知識が十分でないため予測ができない

たとえば、ある語の最初の一音節を聞いたとしても、その語がどのように続くのか、学習者の日本語能力が十分でなければ予測できないかもしれない。また、統語構造などの知識が不十分であれば、予測は難しいだろう。さらに、例4のような社会文化的知識が必要な予測は、学習者にとって難しい場合もあるだろう。

ところで、このような予測が可能であったとしても、かならず重なりが生じるとは限らない。話し手の次のことばが予測可能であれば、聞き手がそのことばを常に発するわけではないからだ。次節では、どのような場合に聞き手が予測したことばを発するのか考えてみる。

3.3 話者が重なりを生じさせる要因

3.3.1 ポライトネス・ストラテジー

先にみた例4では、J4が、J5が21歳であり学生であるという情報から、J5は4年生だと推測し、「4年生ですか」と聞いている。それに対しJ5は「私は一浪してるんで」と、答えたかけたところ、J4が「3年生」とことばを重ねたため、重なりが生じた。ここでJ4は、なぜあえてJ5の発話にことばを重ねたのだろうか。

これは、おそらくポライトネス理論により説明できるのではないだろうか。つまり、初対面の相手に「一浪している」ことは進んで打ち明けたいことではないと思われ、J4の質問は、はからずもJ5のフェイスを脅かす行為(FTA)になってしまった。そのフェイスの侵害の度合いを低めるためのストラテジーとして、J4は、いち早くJ5が3年生であることを互いにとって自明のことで、「一緒ですね」と自分との共通性を強調することでFTAを犯した失態を取り戻そうとしているのではないだろうか。

3.3.2 共感性の形成

筒井(2012)では、雑談を分析し、その連鎖組織を分類しているが、そのひとつに「共有から始まる連鎖組織」を位置づけ、次のように述べている(筒井2012:206)。

共有から始まる連鎖組織においては、<語り-語り><意見提示-意見提示>といった、ある発話タイプに対して同じタイプの発話で反応するという対称的なやりとりや、相手と同じことを同時に発話するユニゾン、相手の発話を引き取って完結させる共同発話、相手の発話の繰り返し、およ

び終助詞「ね」の使用といった方法が、お互いが「同じ」であることを表す方法として、特徴的に用いられる。

このように、「ユニゾン」はお互いが「同じ」であることを表す方法のひとつであるとされている。つまり、発話の進行を促す重なりは、お互いの共感性を表明するときにも使用されるといえるのではないか。そのことは、たとえば、次の例5（会話番号251）のように、発話の進行を促す重なりが「笑い」をとまなうことが多いことからわかる。

例5（J2：日本語母語話者 J3：日本語母語話者 初対面会話）

J2 うーん、でも最初は、やっぱり外国語学部といたら、

J3 <英語>|<|。

J2 <英語>|>| だろう<笑いながら>って。

J3 うん。

以上のように、発話を促す重なりが生じるためには、予測可能であることが必要であるが、そのとき話者に重なりを生じさせる意志がなければ重なりは生じない。そして、その重なりを生じさせようという意志を持つのは、相手のフェイスを侵害してしまったときのポライトネス・ストラテジーとしての場合と、共感性を形成しようというときであるということが考えられる。

3.4 学習者が重なりを生じにくい要因

母語話者場面にあらわれる発話の進行を促す重なりの出現条件から、接触場面で重なりが生じにくい要因を考えてみる。

まず、3.2に述べたように、日本語能力や社会文化的能力が不十分なために「予測」が出来ないという問題がある。これは、学習者の日本語能力が向上するにつれて、解消されていく問題だといえそうだ。

こうした能力的な問題ではなく、重なりを生じさせようという意識の問題に関しては、簡単に解消することが難しいかもしれない。ポライトネス・ス

トラテジーについては、学習者の母語によってストラテジーの違いがあり、あえて重なりを生じさせることこそが、FTA であると考えられる場合もあるかもしれない。その点については、ポライトネス・ストラテジーの対照研究が必要であろう。

そして、共感性についての問題である。たとえば会話番号251は、J2とJ3という初対面の母語話者同士の会話である。この会話は、発話数460で、重なりが31回生じている。そのなかで、発話の進行を促す重なりは6回であった。それに対して、同じJ2が初対面の中国人学習者L2と会話する会話番号255では、発話数390で、重なりは19回、発話の進行を促す重なりは1回のみで、J2がL2の発話に重ねたものだった。

さらに、「お互いが同じである」ことを示す助詞「ね」の使用は、会話番号251では21回で、J2が6回、J3が15回使用している。会話番号255では、23回の使用で、J2が19回、L2が4回の使用であった。これをみると、251では、J3のほうが積極的に共感性を示しているのに対し、255では、J2が積極的に働きかけており、L2はそれにあまり対応していないように感じられる。

また、初対面の母語話者と学習者の会話（会話番号130）では、発話数346で、重なりは26回生じているが、発話の進行を促す重なりはみられなかった。

母語話者場面では、前述の筒井（2012：206）の指摘のように相手の発話の繰り返しや終助詞「ね」の使用などによって互いの共感性を示すことが頻繁におこなわれている。そして、発話を促す重んりの使用も共感性を示す方法の1つであるのに対し、接触場面において学習者が共感を示すために重なりをもちいた例は少ない。こうした事例をもとに、会話指導における重んりの扱いを検討することも必要なのではないだろうか。

4. まとめと今後の課題

本研究では、日本語の談話における重なりには、会話の進行を阻害するさえずり、割り込みといった機能だけではなく、会話の進行を助けるプラスの機能もあることを述べ、後者の機能をもつ重なりが生じる状況を考察した。その結果、重なりがポライトネス・ストラテジーとして使用されている場合

と、共感性を示す場合とがみられることを示した。そして、このような重なりが接触場面においては使用されにくいことを指摘した。しかし、本稿では、いくつかの事例を示すにとどまり、母語話者場面と接触場面の重なり の出現状況の違いを詳細に検討することはできなかった。

今後は、母語話者場面での重なり の出現条件について、さらにくわしく分析するとともに、接触場面における重なり との質の違いを詳述し、日本語教育においてどのような指導が必要であるのか明らかにすることが課題である。

会話データ出典

宇佐美まゆみ監修 (2011) 『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011年版』

参考文献

- 申田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』 世界思想社
- サックス・シエグロフ・ジェファソン (2010) 「会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述」 西阪仰訳 『会話分析基本論集』 pp. 7-153 世界思想社
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』 くろしお出版
- 深澤のぞみ (1997) 「会話への積極的参加としての割り込み発話—異文化間コミュニケーションギャップとの関連—」 『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 147-162 日本語教育学会
- 本田明子 (1997) 「発話の「重なり」と談話進行」 現代日本語研究会編 『女性のことば・職場編』 pp. 197-212 ひつじ書房
- 本田明子 (2002) 「発話の『重なり』に見られる日本語談話進行の特徴」 現代日本語研究会編 『男性のことば・職場編』 pp. 167-178 ひつじ書房
- 水谷信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」 『日本語学』 12-4 pp. 4-10 明治書院
- 好井裕明 (1991) 「男が女を遮るとき—日常生活の権力装置」 山田富秋・好井裕明 『排除と差別のエスノメソドロジー』 pp. 213-249 新曜社
- Lerner, G. H. (2002) Turn-sharing: the choral co-production of talk-in-interaction. In C. E.

Ford, B. A. Fox & S. A. Thompson (eds.), *The Language of Turn and Sequence*.
pp. 225–256 Oxford: Oxford University Press.

(ほんだ あきこ・立命館アジア太平洋大学)